

市議会議員の皆様へ

平成26年11月18日

小さな命の意味を考える会

代表 佐藤 敏郎

平成23年3月11日の大震災で、石巻市立大川小学校では全校108名中、74名の児童が犠牲になりました。教師も10名が亡くなっています。

108名といっても当日欠席、早退、保護者が引き取りに来た児童がおり、当時校庭にいた児童は70数名で、4名だけが奇跡的に助かりました。教職員も助かったのは1名だけです。

学校管理下で、このような犠牲を出したのは大川小学校以外にありません。大川小より海に近い学校はもちろん、もっと海から遠い、上流の学校や保育所も逃げています。

遺族は54家族あります。最愛の我が子を失った上に、安全であるはずの学校で起きた事故という理不尽さが、悲しみを深め、深刻な状況になっています。遺族とすれば、せめてどうしてこのような事態になったのか、知りたいと思うのが当然です。

震災1ヶ月後、内外から批判を受け、ようやく最初の説明会が行われました。そこでは「倒木のために山へ避難しなかった」という説明を受けましたが、倒木は一本もありませんでした。その2ヶ月後に行われた説明会は、質問が噴出しているにもかかわらず、時間だからと途中で打ち切られ、報道には「遺族は納得」「説明会はこれが最後」というコメントが発表されました。市長も出席したのですが、「自然災害の宿命」と発言し、批判を受けました。この6月までの市教委の対応の不誠実さが、今日までの状況を生み出したと言えます。

その後、さまざまな事実や資料が明らかになり、24年1月に話し合いが再開しました。その間、私は何度も市教委に出向き、なんとかならないかと調整を続けました。教育長にもお会いし、遺族の心のケアの面も考え、54家族に丁寧に対応してほしいとお願いしました。

しかし、石巻市教育委員会も、文科省が立ち上げた検証委員会も、説明を尽くしてくださったとは思えません。特に、もっとも知りたい「なぜ避難しなかったのか」については、踏み込んだ議論をせずに「忘れた」「今後検討」を繰り返し、ごく一般的な提言をまとめるにとどまっています。

この度、訴訟を起こした遺族も多数いますが、やむにやまれないつらい選択です。あの子たちの小さな命を意味あるものにしたいという願いは、訴訟に参加しなかった私も同じです。現実をしっかりと見据えながら、大川小のことを、悲劇としてだけではなく、学びに変え、未来への輝きにつなげていかなければと思っています。

震度6強というそれまで体験したことのない強い揺れが3分も続いた後、大津波警報が発令され、防災無線やラジオ、市の広報車がさかんに避難を呼びかけていました。その情報は、校庭にも伝わっていて、子どもたちも聞いていました。

体育館裏の山はゆるやかな傾斜で、椎茸栽培の体験学習も行われていた場所です。そこに逃げようと子どもたちも訴えていました。迎えに行った保護者も「ラジオで津波が

来ると言っている。あの山に逃げて」と、対応した教師に進言しています。スクールバスも待機していました。

校庭で動かずにいる間に、津波は川を4km遡り、堤防を超えて大川小を飲みこみました。15時37分、地震発生から51分、警報発令からでも45分の時間がありました。

子ども達が移動を開始したのはその1分前、移動した距離は先頭の子どもの180mほどです。なぜか山ではなく、川に向かっています。ルートも、狭い民家の裏を通っています。しかも、そのまま進めば行き止まりの道です。時間的に、最初の波で堤防から水があふれていた頃の移動開始です。避難ではなく、津波が来たのでパニックになったと言えます。

時間も情報も手段もあったのに救えなかった、それはなぜかを議論することが必要です。ところが、市教委の説明では、救える条件があったという事実、すなわち「時間が十分にあったこと」「子ども達が逃げたがっていたこと」「ラジオ、保護者の呼びかけなど、津波の情報を十分得ていたこと」「山に登るのが可能だったこと」「スクールバスが避難の準備をしていたこと」という明かな事実を、曖昧なものにしています。助かった子ども達が、犠牲になった友だちのために、一生懸命話してくれた証言さえ、なかったことにされています。早くから訴訟対応を視野に入れていたようで残念です。

危機感を感じていながら「逃げろ」と強く言えなかったのはどうしてかを考察しなければなりません。どうして組織が機能しなかったのかです。あの日から、自分自身に言い聞かせている、重い重い言葉です。守るべき命、しかも守ることが可能だった命を守れなかった事実から目を背けてはいけません。警報が鳴り響く寒空の下、校庭でじっと指示を待っていた子どもたちに耳を澄まし、目を凝らせば、方向性は見えてくるはずで

す。事前の備えも杜撰で実体のないものだったということが分かっています。津波の時の避難マニュアルや緊急時の児童引き渡しのルールも、不十分ながらあったのですが、教員間での共有がされていませんでした。当然、家庭への周知や訓練は皆無でした。命を守るためのものではなかったのです。

だれも悪意をもっていただけではありません。先生方はみんな一生懸命だったはずで

す。でも、救えなかった、それはなぜかを、先生方のためにもきちんと考察したいと考えています。先生方は、黒い波を見た瞬間「ああ〇〇すればよかった」と後悔したはずで

す。その後悔を無駄にたくありません。

私は、個人の責任やミスを責めるのではなく、学校という組織が本来の目的に向かうための、議論につなげていくつもりです。学校で起きる事故や不祥事はもちろん、学力向上、生活習慣作り、集団活動といったすべての教育活動に結びつく提言に結びつけたいと思っています。検証委員会はその分野の方が不在でした。学校で起きた事故の検証に、学校関係者がいなかったのです。大きな反省点です。

学校だけではなく、私たちの周りには様々な概念、価値観、システムを見直すことは、東日本大震災で、現代社会が突きつけられた宿題のような気がします。その宿題は、

情報や物が氾濫する一方で、多忙感、閉塞感が蔓延し、本質的な豊かさが失われている我が国の方向性にも影響を与えるほどの意義をもつように思います。

現在私は、関心をもってくださっている方々と、「組織の意思決定のあり方」「命の大切さ」「命を預かる意味」「心のケア」などをテーマとした話し合いや、授業づくりに取り組んでいます。

私は、震災後間もない頃から、教育委員会の先生方と、話し合いを続けてきました。市教委が正しい情報をつかんでいるのは明らかですし、この事故を反省し、今後の学校づくりのための教訓としなければならない当事者中の当事者です。子ども達の命を真ん中にして、誠意をもって向き合えば、はじめはかみ合わなくても必ず方向性は見えてくると信じています。

市教委の先生方は、旧知の方も多く、気心も知れています。ですから、私の思いは間違いなく通じているはずです。しかし、残念ながら、検証委員会が立ち上がってからは「検証中なので」、裁判が始まると「訴訟中」ということで、なかなか話し合いを進めていただけない状況です。私は、検証委員会や裁判といった次元を超えた議論をしようと考えています。

そのためには、当時の市教委の担当の方と、唯一生還したA教諭が、正直に事実を話してくださることが必要です。A先生は、第一回目の説明会に出席していただきましたが、その時の証言には「倒木」をはじめ、矛盾が多く指摘されています。そして、その後は主治医が許可しないということで、誰とも面会できないことになっています。（検証委員会の聞き取りには協力しています。）

市教委の前担当の方が証言してくださることはもちろんですが、A先生とは、ぜひ会ってお話をしたいと願っています。先生が「子どもを救えず、自分だけ生き残って申し訳ない」と考えているのかもしれませんが、でも、私は「生きていてくれてありがとうございます」と、まず言いたいです。先生が生きていてくれたおかげで、子ども達の命が未来につながる意味をもてるのです。ましてや、娘の大好きだった先生です。会って話をすればきっと分かっていただけと信じています。

東日本大震災では多くの尊い命が犠牲になりました。その命に意味づけをするのは、生かされた私たちの役割です。

大川小の校歌にはタイトルがつけられています。「未来をひらく」です。今、そのタイトルの意味をかみしめています。

私は大川小学校は、始まりの地だと思っています。もう一度、命の大切さやよりよい学校のあり方を確かめる場所であるべきです。多くの方がそういう想いで大川小に向き合えるようにしたいです。小さな命たちが、大切な意味を持たたとき、私たちの向かう未来で、子ども達がニコニコ笑っている気がします。

震災から3年以上になりますが、何度も現地に足を運び、一緒に考えてくださる報道の方や、学者の方々にも貴重なご意見をいただいています。また、国内外の多くの皆様が我が事として考え、応援してくださいます。ほんとうにありがたいことです。

少しでも事態がよりよき方向に向くよう精一杯精進させていただく所存でおります。